◆庄内人紹介②　＜『TOCHiTO 通信』インタビュー　ロングバージョン＞

庄内・酒田での持続可能なまちづくり、ぜひご一緒に!!

～五十嵐康達（やすみち）さん〈酒田市地域創生部地域共生課　課長補佐〉

庄内人紹介の2回目は、酒田市の移住定住施策に 2016 年から携わり、行政の立場から TOCHiTO プロジェクト推進に精力的に取り組まれてきた五十嵐康達さんです。

――TOCHiTO プロジェクトは、酒田市・事業主体者・生活クラブの相互連携がとてもよく機能し、移住希望者に大きな信頼感を与えていると思いますが、そもそも酒田市と生活クラブの連携のきっかけは？

五十嵐主査　地元の生産者さんによる橋渡しがきっかけです。2015 年、酒田市は「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、移住対応の専門窓口を設けました。当時の増田レポート（人口減少を食い止めないと地域そのものが消滅する）に象徴される危機感からです。ただ、どうすれば首都圏の人が移住してくれるのか、その道筋が見えず当初は手探り状態でした。一方生活クラブさんでは、同じ時期の 2015 年に第６次中期計画がつくられ、選択肢の一つとして「産地で暮らす」ということを検討され始めていました。産地の支援という観点と、組合員のニーズにどう応えていくかということから、生産者との長い交流の歴史があり、組合員が魅力を知り尽くしている「食のふるさと」での暮らしはどうか、ということだったと理解しています。

生産者さんには両方の動きが見えていたんですね。その橋渡しで 2016 年から連携が始まりました。

まずは、酒田市の（移住環境の）調査と首都圏組合員の移住に関するニーズ調査からスタートしました。

首都圏での移住相談会にて。写真超しでも笑い声溢れる和やかな雰囲気が伝わってくる。明るく朗らかな人柄で、初対面の人ともすぐ打ち解け合えるのも大きな魅力の一つ。

実は、私は生活クラブさんを、失礼ながらほとんど存じ上げず、「なんだろう、この団体は」がスタートでした。けれど、調査活動などに一緒に取組み、意見を交わす中で、生活クラブさんを知れば知るほど、とてもエネルギッシュなすごい団体だと思い始めました。

アンテナを高く保ち、地域の課題に対し深く、かつ真剣に向き合い、自らが主体となり解決していく。ワーカーズコレクティブとか福祉施設をつくってしまう、すごいことをされているなと。そして、東京や酒田の地で直接移住検討者の皆さんとお話しする中で、前向きに出される質問や意見，何より酒田への関心の度合いの高さに圧倒されました。お会いするたびに元気をいただくと同時に、こうした方々が地域に移住してきてくれたらまちが元気になっていくんじゃないか、との期待感が高まっていったことを記憶しています。

――共に地域づくりを行っていきたい、つまり、単に住んでもらうということでなく、一緒に地域を元気にしていきたい、そこに移住施策の焦点をあてたい、と思い始めたということでしょうか？

五十嵐主査　そうですね。当初の国の施策イメージのようなシニア層を対象とした、例えばサービス付き高齢者住宅建設というイメージからは少しずつ離れていきました。そして酒田市の「生涯活躍のまち構

想」と生活クラブさんの「FEC 自給ネットワーク構想」をもとに検討していくなかで、それらがリンクし「単なる移住施策ではなく一緒に持続可能なまちづくり」をとの考えに至りました。

ただ、具体的な政策への落とし込みはなかなか簡単にいきませんでした。そもそも移住政策は若者や子育て世代が中心ではないのかと、当初のシニア移住を前面に出した日本版 CCRC 構想への懐疑的な意見を払拭しながら、政策的な変化の部分を役所内や議会に示していくステップですね。「生涯活躍のまちづくり、とは多世代・多様な人がまちづくりにかかわっていく施策だ」との政策的な変化をうまく表現し、拠点の候補地を選定し、全体的な整理をつけていくことに苦労しました。

生活クラブさんからは、「なんと煮え切らない、時間がかかる相手なのか」と思われていたのではないでしょうか。そのあたりが心苦しかったところです。

――けれどそうしたご苦労は 2018 年に策定された「酒田市生涯活躍のまち基本計画」の中に見事に結実し TOCHiTO プロジェクトが第一弾の事業になりました。居住棟は早くも満室です。

五十嵐主査　こんなに早く満室になるとは正直思っていませんでした。TOCHiTO 全体の仕組みが良かったこと、生活クラブさんが一緒に事業展開しているという安心感、そして、西村社長というとても良い事業者にお受けいただいたこと、そういったことが積み重なった結果だと思います。

次なる展開の検討も始まりました。まずはどこに住んでいても、希望者は TOCHiTO と関われる仕組みづくりに急ぎ取り組んでいます。

移り住むということは人生の決断ですし、大変なことです。不安な点・不明な点はまだまだあると思います。何か聞きたいことがあればどんどん質問・相談していただきたいと思います。

これまでの移住相談で酒田の感想をいっぱい頂いてきましたが、特に印象に残っている一言があります。「酒田には上質な当たり前がある。環境とか食の豊かさとか、自然や暮らしのリズムとかもそう。人と人とのつながりもありますね。地元の皆さん、当たり前だと思っているけれど、それ、すごく上質ですよ」と。これを聞いたとき、はっとさせられ、そしてとても嬉しく思いました。

皆さんの参加を酒田の地でお待ちしております。そして、（もちろん、各人ができる範囲で、気負わずに、を前提としてですが）一緒にまちづくりに取り組んでいけたらと願っています。

「検討する会」にて皆さんとのグループワークの一コマ。これからの TOCHiTO でどんなことをやっていきたいか、自身もアイディアを出しながら、和気あいあいの雰囲気の中で一緒になって検討した。

＜取材を終えて＞

・こちらのやや焦点のぼやけた質問にも即座に意を汲み取り、丁寧にかつ分かりやすくお応えいただきました。お話も多岐にわたり、紙幅の制限で泣く泣く割愛した部分もあります（例えば、国は第２次「生涯活躍のまちづくり」でそのコンセプトを「誰もが居場所と役割のあるコミュニティづくり」と１次から明確にシフトチェンジをしたが、実はその前に、酒田市では「基本計画」を書ききっていた。五十嵐さんに、「やっと国が追い付いてきたか、の状況でしたね」と話を振ったら、「いえいえ（笑）、『基本計画』の方針が間違っていなかったことに安堵しました」と）。

小学校から野球一筋で、社会人になってからも草野球に親しむ。けれど、子どもたち（高３男子、中３女子）がストリートダンスにとても熱心に取り組んでおり、送迎等のバックアップで、しばし自身の草野球はお休み中。「もう体が動きません（笑）」とも。お連れ合いとの４人で酒田に住んでいます。小さい頃から阪神のファン、とのこと。「父親が巨人ファンだったから（笑）」。……第２弾の取材申込みをさせていただきたくなってきました。（S）